



片泊

塩手鼻

黒島は火山島である。残った島の形から、標高六二〇mの櫓岳付近を噴出の中心とする円錐状の火山だったと推測される。岩石磁気測定や放射年代測定から、黒島の主な部分は第四紀更新世の八十万年前頃に噴出した可能性が高い。この年代は現生人類の登場前で、大陸では石器を使う原人が暮らしていた。

三島で最も侵食がすすんだ黒島だが、各所で火山活動の痕跡が見られる。片泊の塩手鼻では、黒島の形成過程にできたであろう『柱状節理』が確認される**A**。『柱状節理』とは、写真にあるとおり岩の角柱状の割れ目を呼ぶ。

火山から流出した厚みのある溶岩流は、ゆっくり冷え固まると体積が収縮して規則正しく柱状に割れる。柱は表面から溶岩の内側へ固まりながら伸びてゆく**B**。一般的には、時間をかけて冷えるほど太くなるという**C**。角柱の断面は六角形が多いが、四角形や五角形もある**D**。そのため太さも断面形も多様な柱状節理を見ることが出来る。

塩手鼻はもともと釣り場として人気で、一九八二(昭和五十七)年に道ができる前は岩間を伝って海辺**E**まで降りて釣りをした。

思い出話

「ここは潮の流れも早く、岩礁の下がえぐれて海から登れないので、泳ぐととても危険ですが、子供には魅力的な釣り場でした。」

片泊地区六〇代男性

